

このごろ大学や研究について考えることが多くなった。もう定年だから、いまさら、そんなことを考えても仕方がないのだが、研究者としてはとっくに終わっていて、少し距離をおいて考えられるようになったということかもしれない。おかしなことを考える。上手く表現できないので、誤解をおそれずにもものすごく簡単にいうと、誰もが一生懸命に素晴らしい研究をしなければいけないのだろうかということを考えている。もちろん、素晴らしい研究をしようと努力することは良いことだし、そういう人がたくさんいると良いと思う。つまり、私が言いたいのは、くだらない研究をしたり、適当に研究する人も必要なのではないかということだ。学問とは様々な知識の集合体だ、いろいろな知識や情報がつながり合っている。そうしたつながりの一部に応用的にも理論的にもとても役に立つ部分がある。それが業績としてたたえられる研究だ。しかし、そのような部分もまた、どうしても良いような知識や情報ともつながっていて、それらに支えられて輝かしい部分が存在する。そうした部分は生産性が高く、研究投資としても投資効果が高い。その輝かしい部分だけで研究が構成されていればどれほど良いだろうかと思うことは自然だし、研究予算をつける方もそういう期待で資金を提供しているのだろう。しかし、科学は連続した知識の集合体として存在するのだから、輝かしい部分だけを切り離して存在させることは無理だ。くだらない研究にもある程度の予算を付けて、それを楽しむ文化のようなものが必要なのではないかと思うのだ。江戸時代の和算などは、何か実用目的があったのだろうか。何となく遊んでいるような雰囲気がある。それらが重要な科学に基礎だということがわかってくるのはもっと時代が進んでからだろう。くだらない研究の多くは、時間がたってもやはりくだらないのだが、中にはそうでもないことがあって、思いもつかない意味を持つことがある。将来何が役に立つのかということは今この時点ではわからない。あまりに一所懸命、くだらないものをなくそうとすると、将来、役に立つ可能性のある物まで排除してしまいかねない。そういうものを置いておく場所が必要で、それが大学なのではないかと思う。このごろは何でも格付けしたがる。大学の格付けもしばしば話題になる。こういう格付けの中に、どうしても良いような研究をしている余裕を持った大学という評価はないのだろうか。短期的に何かの役に立つ道具・手段として大学の機能を捉える考え方は、短期的な有効性だけを問題にして、就職への足掛りに過ぎないと大学を捉えている学生の考え方と大して変わらない。短期的・機能的にすべてを捉えて評価するやり方が結局そういう学生を作っているのではないかと思う。

(2015)